

関東軍石頭予備士官学校第六中隊五区隊から、八月九日ソ連軍侵入のため、後発隊として東京城方面へ出陣。

昭和二十四年八月、明優丸で帰国。

シベリアの四年間、ほとんどがバム鉄道建築関係の重労働であった。ソ連は幾十万の日本人を無償で酷使したのである。そしてあの長い鉄道が完成した時は過ぎ、市井では若者が青春を謳歌している。彼らに、この平和の礎となった当時の若き戦士が、シベリア以外でも、陸に海に空に尊い命を散らし、また懸命に生きたことをお伝えできれば幸いである。

思いつくまま

滋賀県 望 田 宇三郎

昭和十九年二月、現役召集により満州第六一二部隊砲兵隊第四中隊に入隊。広島西練兵場に集合の上、博多港より出航、朝鮮釜山港に上陸する。ここから列車

で入隊地、黒河省朝水の兵舎へと向かった。朝鮮を経て北満の黒河省朝水駅に着いたのは約一週間後のことであった。

駅に降り立ち、見渡せば、白一色の銀世界の広大な原野。兵舎までの距離は約二キロ、徒歩で兵舎へと向かう。

朝水は砲兵一個中隊、歩兵二個中隊の陣地で、営門を入り右側に砲兵中隊がある。砲十門、榴四門、高射砲三門が配備されており、観測、通信、砲手の三部に分けられて、初年兵教育が実施された。私は観測班に属し訓練を受けることになった。

第一期の検閲も無事終了し、厳しい寒さもようやく和らぎ、凍てつく大地も溶け始め、野山に花が咲く季節となり始めたころ、陣地周辺の防衛のため戦車壕構築の作業が始められた。

翌二十年七月、部隊の編制が変更され、大隊が三個中隊編制設置され、挺身大隊第三中隊に転属。挺身隊とは、重火器などの兵器はなく、専ら肉迫攻撃訓練が実施された。そして、中隊は二站^{よかん}陣地防衛のため移動

し、陣地構築、戦車壕構築に従事する。

八月九日、ソ連参戦。中隊は各一個小隊を朝水陣地、瓊瑋陣地の防衛に、本隊二個小隊は二站防衛に当たる。いよいよソ連軍の戦車が黒龍江を渡り瓊瑋方面へ向かいつつあるとの情報が入る。ほどなく瓊瑋陣地では激しい戦闘が繰り返されているとのこと。二站陣地では戦車に対する攻撃のため、侵入道路となる道の両側にタコツボを掘る。敵の戦車攻撃に備え、その夜より攻撃態勢に入る。

八月十五日ころより戦車攻撃が激しくなり、前方東側の陣地では下士官候補隊による肉迫攻撃が繰り返され、多数の敵戦車を擱座^{かくざ}炎上。当陣地も肉迫攻撃により戦果を上げた。しかし多くの戦友を失った。

八月十七日ころ、夜、大隊本部より隊長に本部へとの連絡があり、隊長の後ろにつき本部洞窟へ急ぐ。隊長は中に入られ、私は入口で待機。長時間の協議がなされ、夜半、中隊幕舎へ帰る。途中、中隊長は独り言のように「大変なことになった」とつぶやかれた。そのときは深くを聞くことはできなかったが、後に、戦

争終結の特使による伝達があったことを聞く。大隊長はこれを信ずることができず、戦争は続行されることとなる。特使の将校は聞き入れられないことを残念と自決されたと聞く。

そのうちにソ連戦車が陣地の西方に停車し、宿営の模様を遠望。大隊本部より挺身中隊に攻撃の指令、直ちに一個分隊が攻撃することとなる。幕舎より前方二、三百メートルの丘より敵の宿舎の様子を明確にとらえることができる。隊長より迂回路を経て接近し攻撃爆破の指令を受けた分隊は出発していった。それより数時間経過、本部より戦争終結の連絡が入る。戦車攻撃に出発した分隊が成功すれば大変なことになる。攻撃中止の連絡をとることとなり、数名が出発するが、合流することができず帰還する。心配しながら状況を見守るうち、夜半となって分隊は目的を果たすことなく帰ってきた。隊員の中で攻撃に行き違いが生じ、攻撃困難となり、やむを得ず引き返したと報告された。この行き違いが結局よい結果をもたらせたこととなった。

八月二十三日、二站で武装解除を受ける。全員集合

する中、詔勅が朗読されたが、内容を明確に理解することができなかった。二站陣地には糧秣や被服などが多数備蓄されていたので、服装はすべて新品に取り替え、多量の糧秣を携帯して孫呉へ向かう。夜中、孫呉に到着、軍人が軍属官舎に入る。

孫呉では使役に出ることが多く、他はこれといったこともなく日が過ぎていった。ある日突然全身を薬品で消毒されることになり驚いたが、これはシラミなどの駆除のためであった。そして作業大隊が編制され、途中、作業に従事しながら帰国するということで、若干希望を持ったものである。

九月十日いよいよ大隊は出発することとなり、それぞれにいつぱいの物を背負い行進を始める。途中、右の方へ道をとれば帰国、左へ行けばソ連へ入るということになる。このことを皆で話し合ったものである。問題の分かれ道で左への行進とわかり愕然とする。シベリア行きの覚悟を決めねばならなかったのである。しかしソ連兵は「ダモイ東京」を言い続けた。いよいよ黒龍江岸へ。渡河は一個隊が乗り込めるタンカーで

ソ連領へ入る。入ソと同時にソ連の兵隊がにわかに大きな声で歌い、はしゃぎ出したのである。

上陸直後、貴重な持ち物を住民に取られてしまった。追いかけてようとして歩哨にとめられ、諦めざるを得なかった。残念この上なし。

上陸後、長い行進が始まることになる。行進を重ね、行けども行けども丘ばかり。集落の近くでは馬鈴薯掘りの使役を重ねながら、一カ月余り、ようやくライチハ収容所にたどり着いた。

収容所はテントづくりの幕舎で、十月ともなると朝は霜がおり、寒さがじわじわと身にしみる。テントの中にはドラム缶のようなストープが一個きりで、十分な暖を取ることはできず、防寒帽や防寒靴をはいたままの就寝となり、十分な睡眠をとることもできない。加えて食事も粟のスープに黒パン一片といった最悪の状況である。

作業は炭鉱の鉄道線路の設置や移動作業、また炭層表面の土砂の取り除きなどである。酷寒の中、夏の被服のみの者もあり、作業のノルマも厳しくなかなか達

成で、作業から帰って幕舎で倒れる者が日増しにふえ、筆舌では表すことのできない過酷な状態であった。年が明けて三月ごろより食事がよくなり出す。夜は食堂で食事ができるようになり、炊事係の人たちの努力でいろいろの工夫がされた献立となり、我々を楽しませてくれた。

収容人員一万人。炊事は第一、第二と分かれていて、私は第二炊事の糧秣倉庫で復員までここで働くことになる。毎日、糧秣の払い出し、駅へ米、大豆などの受領、コルホーズへの野菜、缶詰などの調達受領。ソ連兵歩哨への食糧の払い出しもあり、大変な仕事だった。そのうちに復員が始まり収容人員も減少し、第二炊事は閉鎖され、第一炊事の倉庫へ移る。

昭和二十四年七月、復員の編制がなされ、その一員として帰国することとなりナホトカへ向かう。七月二十七日、恵山丸にて舞鶴港に上陸、帰国となる。

戦後五十年、共に帰国を夢に頑張る、ついに望みを果たし得ずして凍土に散った戦友のことは、一日として忘れることはない。

シベリア抑留体験記

静岡県 赤堀 四郎

大正五年静岡生まれ。地元高小卒後、家業の農業手伝い後、上京。書籍店に勤む。現役兵として昭和十三年三月、広島集合。関東軍綏芬河陸軍病院要員として入隊。以来、転属二回。二十年六月、第十一国境守備隊解散、歩兵第二七九連隊編制。八面通に駐屯し、西方自興屯に陣地構築作業に入る。同年七月、朝鮮兵百三十名、現地召集兵約八百名人隊あり。衛生業務多忙を極む。装備は銃及び帯剣など皆無で、竹製水筒携行、軍服は通常支給あり、全員陣地構築に就く。

八月九日未明、ソ連機の飛来、爆弾及び機銃掃射を受け開戦を知る。八月十二日、連隊は牡丹江市民防衛の命を受け、東方愛河に転進、第一、第三大隊をもって布陣する。第二大隊は前記自興屯に残留、ソ連の前進の防衛に苦戦、ついに全滅する。愛河における戦闘